

A black and white photograph of a forest. In the foreground, a person wearing a white protective suit and a white hard hat is seen from the back, working on a large log. The background is filled with many tall, thin trees. A black circle with white text is positioned in the upper right area of the image.

第2部

山づくり
人づくり
ものづくり
チャレンジ!

事

私たちのチャレンジ！

例

「ヨロイマツ」遺伝子の保存にかける夢

大田市林友会「島根県」

市民とともに
歩んできた活動

大田市は、島根県の東西の中心部に位置し、面積4万3000ha、人口3万3000人ほどの小さな市です。当市の世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」は地域の宝であり、日本はもとより世界に誇れる地域資源です。

大田市林友会は昭和40年に発足

し、現在の会員数は男性32名、女性5名の計37名。近年、林業に関心を持つ女性や若い男性といった人たちの入会もあり、先行きは明るいと感じています。

これまでの活動に「学習機の天板寄贈」があります。市産材アカマツを地元業者が学習機の天板として加工したものを市内の小中学校に40

枚を寄贈し、森林学習も行いました。また荒廃森林対策として「竹林整備とお楽しみ活動（竹炭づくりと竹筒ご飯づくり）」を市民参加型で実施しております。その他さまざまな取り組みをしている中で、今回はヨロイマツの遺伝子保存の活動についてご紹介します。



ヨロイマツの発見



接ぎ木による遺伝子の保存。クロマツ（抵抗性）の2年生の台木を使用

「ヨロイマツ」の発見

ヨロイマツは、アカマツ、クロマツの混種で独特な特徴を持った、全国のみならず世界を探しても大

机の天板寄贈





見事な年輪が現れているヨロイマツの長押

田市内のみで見られる極めて貴重な在来種のマツです。かつてはたくさん自生していて、建築用材として使われていました。しかし、松くい虫による被害で、すでに自生していないと諦められていました。ところが平成5年に偶然、3本の生存するヨロイマツを確認しました。しかし数年前にマツクイムシ被害で2本は枯損し、残り1本となっていました。その後、令



作業路開設地における皆伐山林での高性能林業機械作業の現地視察

和2年に新たな生存木を1本確認し、現在確認できている生存木は2本となっています。ヨロイマツには大きく2つの特徴があり、第1に樹皮の下側が反り返り、鍔の草ずりのような鱗片が幹の周りを一周しています。さらにそのような鱗片が木の上にむかって何段にも形成する、まるでヨロイを想像させる樹皮です。第2の特徴は、製材すると板目の面に美しい複雑な本目が現れること

です。

ヨロイマツの復活に向けて

残った2本の天然ヨロイマツを是が非でも後生に残すため、所有者の理解を得て数年おきに松くい虫被害予防薬剤の注入や周辺の不要木除去も行っています。また、平成11年から接ぎ木による遺伝子の保存にも取り組んでいます。

活着した苗は会員に配布し、それぞれの山に植えることになりましたが、余裕があれば希望者に頒布したいと考えています。島根県立緑化センターの指導のもと、これまで260本を育ててきました。台木はクロマツ（抵抗性）の2年生を使用し、穂木は接ぎ木で育てたヨロイマツから採っています。接ぎ木は割り接ぎにより行い、形成層を



大田市林業祭へ出店

うまく合わせるために接触面が動かないようにすることがポイントです。しかし、毎年50本程度を接ぎ木して、うまく活着するのは10本程度です。全滅の年もあり、さらなる技術向上に努めています。私たち大田市林友会は、このような希少なヨロイマツが見事に奇跡の復活を遂げたと、大きな声で誇らしく発表できる日を夢見て、日々遺伝子保存の研さんを積んでいるところです。

＊まとめ

会長 和田秀夫

事

私たちのチャレンジ！

例



間伐展示林での説明



ノコギリで丸太切りを体験



伐倒実演で山の作業の雰囲気を感じ



木の伐り方などについて説明

子どもも山主さんも 森林への関心を！

山を愛する メンバーが結集

武雄市の武内町は、佐賀県の西部に位置しており、町の面積は約25㎢、人口は約2700人の小さな町です。この町で活動している武内町親林会は、平成5年3月に発足し、31年目を迎えます。

グループ発足のきっかけとなったのは、平成3年9月に九州北部を襲った台風17・19号による甚大な森林被害です。私たちの住む武内町の森林も壊滅的な被害を受け、「このままでは地域の山がダメになってしまう。どげんかせんといかん」という思いから、森林被害の復旧に向けて行動を起こそうと、山を愛するメン



山を愛するメンバー「武内町親林会」

バーが結集し発足しました。

現在、会員数は14名で、地域の森林環境の保全と良質な木材の生産のために、意欲的に活動してい

ます。

子どもたちに森林への 関心を深めてもらう

最近、私たちが特に力を入れて取り組んでいる活動を紹介します。全国的な問題でもあると思いますが、森林への関心の薄れや後継者不足などから、武内町でも手入れ不足の森林が増加しています。この課題の解決に向けて、次代を担う子どもたちに、身近にある森林の現状を知ってもらうとともに、

森林の役割や大切さを伝えていきます。そしてなによりも自分たちのお父さん、おじいさんたちが一生懸命に森林を育ててきたことを知り、少しでも森林に目を向けてもらいたいという思いで、地域の小学生を対象とした森林学習会に取り組んでいます。

学習会では、会員が所有する間伐モデル林に行き、実際に森林を見ながら山の手入れの必要性などについて説明しています。また、林業普及指導員にも協力してもら

「楽しかった」「とてもよい体験になった」「実際に木の手入れをしてみたい」などの声も聞かれ、私たち林研メンバーも大変うれしく感じています。

所有者の森林への 関心呼び戻す

地域の森林所有者のみなさんにも、もっと森林に関心を持ってもらうとともに、山からの恵みについて再認識してもらいたいという思いのもと、林業普及指導員の協力も得ながら「チェーンソー目立て講習会」や「しいたけ駒打ち体験会」を開催しています。

参加者からは、「久々に自分の山に行ってみるか！」「いったうれしい声もあがりました。こうした講習会をきっかけに、薄れかけていた山への関心を取り戻していただく方が、少しずつでも増えていくことを期待しています。」

武内町親林会では、今後ともこ



「チェーンソー目立て講習会」



「しいたけ駒打ち体験会」

い伐倒実演を行っています。木の伐り方などについて学ぶとともに、チェーンソーの音や木が倒れる音、衝撃などを通じて、山の手入れの雰囲気を感じてもらいます。さらに、実際にノコギリを使った丸太切り体験も行い、木の香りも感じてもらっています。

学習会に参加した子どもたちからは、

うした取り組みを継続、発展させ、手入れ不足の森林を減らして豊かな森林をつくり、次代を担う子どもたちに引き継いでいきたいと考えています。

私たちが地域の森林づくりの先頭に立って、林業の振興や地域の活性化に貢献していきたいと思

＊まとめ

会長 古賀徹之

事

私たちのチャレンジ！

例



インターンシップで製材所を見学。いつか地元スギ材の建築物を建ててほしい

建築学科の高校生に インターンシップ提供 津山町林業研究会「宮城県」

「津山スギ」の
一大産地で活動

宮城県の北東部にある登米市津山町は、森林面積が総面積の8割を占め（5600ha）、人工林率は75%に達します。その9割がスギで、ブランド「津山スギ」の一

大産地を形成しています。

津山町林業研

究会は、昭和57年に森林所有者を中心に結成されました。その後、伐採搬出業

者・森林組合職員などの素材生産

者や木炭生産者・木工職人・農協

職員等の流通加工関係の新会員7

名が加入すると、木に携わる人た

ちの情報交換が活発化し、会員相

互の親睦が進みました。現在は14

名で活動を行っています。

当林研では、これまでに産業界

験・食育・自然体験・環境学習等

を通じて森林文化を伝えることで、

森林・林業後継者の育成に積極的

に取り組んできました。最近では、



ハーベスタによる伐倒・玉切りの見学。普段使用する工業設備にはない感触を体験

地元小学校の「みどりの少年団」

に対し、林間を利用したワサビ栽

培の現地見学・食育を実施してい

ます。また「市民参加の新たな森

林づくり」と題し、登米市が開催

している植樹祭には、長年関わっ

ています。

地元スギ材で建築物を
建ててほしい

林研活動のさらなる飛躍のため
に、木材需要や価格の低迷等の課



市有地の原野を森林に戻すための「市民参加の新たな森林づくり」（植樹祭）。

林研が植栽方法などを指導する

題解決にも取り組んでいます。「津山のスギ」の「よき需用者（消費者）」を増やしていくにはどうすればよいのか会員で考えた結果、平成20年から、あえて農業高校ではなく、建築を学ぶ工業高校生を



下刈り鎌を使って作業



小学生の林業学習で木炭生産者の話を聞く。この木炭は牛タン屋に提供されている



小学生のワサビ栽培の現地見学・食育。ワサビだけの手巻き寿司をおかわりしながら、笑顔で食べていた

＊まとめ
事務局 佐々木寿光

うに思われます。
今後は、いただいた提案も組み入れながら、さらなる活動の拡大・充実に努め、農業・水産業等との連携も視野に、地域のリーダーとなる後継者育成の道を模索してみたいと思います。

ターゲットにした「インターンシップ」を始めました。
林業体験の実績があった、宮城県古川工業高校に好意的に受けてもらい、登米市担当者および県の地域事務所の支援のもと、活動を行っています。
令和4年度はスギコンテナ苗を植栽し、ニホンジカの食害に対する単木防除等を行いました。生分解性樹脂の筒を植栽されたスギに被せ、人工いぼ竹の支柱で保持するという簡単な方法で設置できるので、高校生インターンシップ活動に最適と判断しました。植栽地は幹線道路に沿った市有林なので、

市において施工コストを環境サービスが吸収できると判断されたところです。そこに、現代病のスギ花粉症対策のため少花粉スギコンテナ苗を植えることとしました。
令和5年7月20日には2年生40名を対象としたインターンシップを行いました。まず前年に先輩方が植栽した少花粉スギについて、県の地域事務所から品種などの特性の説明がありました。次に、下刈り作業の注意点を林研メンバーが説明し、実際に下刈り鎌での作業をしました。高校生からは「植林により環境改善がされることは、意義のあることだ」といった感想

を聞くことができました。スギは樹形の偏奇もなく、すくすくと育っています。ケガもなく、適切に下刈り作業を終えることができました。
これまでに、建築学科1年生を対象とした下刈りやノコギリによる間伐体験、チェーンソーによる丸太切り、ハーベスタによる伐倒・玉切りの見学を行い、普段使用する工業設備にはない感触を体験してもらったりもしました。建築学科であっても木材として成長するまでの過程を学ぶ機会が現状ではほとんどないので、今回のような体験は非常に意義があるとい

後継者育成の手応えをつかむ

う声を先生方からいただきました。将来、生徒たちがこの体験を思い出し、地元スギ材を活用する建築物を建てる人材に育ってほしいと願っています。

今回のインターンシップでは、社会人に近い世代の育成に取り組む、より具体的に後継者育成の手応えをつかむことができました。これまで教える側からの視点で行っていましたが、回を重ねるうちに学校側からも研修内容を提案されるようになり、学校との結びつきが深くなってきたように思われます。

事

私たちのチャレンジ！

例

竹の活用技術を地域住民に伝授

みよし 三次市森林・林業研究会「広島県」

復活！ 「山仕事講座」

三次市森林・林業研究会は広島県北部の三次市で活動する林研グループです。会員は17名で、平成17年より市民を対象として始めた「山仕事講座」を活動の中心としています。これまで初心者を対象とした「山仕事のいろは」から「天然キノコの採種会」や「災害用ロケットストーブの普及講習会」、「簡易搬出技術の習得会」など毎年テーマを決めて実施してきましたが、コロナ禍では開催を見合わせていました。

昨年12月に「山仕事講座」を復活させることとなり「無煙炭化器及びウッドチップパー活用講習会」を開催しました。今回はこの講習会についてご紹介したいと思います。

竹林繁茂対策と 地域資源の活用を目指して

竹林の繁茂・荒廃は、全国的な課題になっています。われわれの地域でも活用されなくなった竹林による景観悪化はもちろん、道路通行の妨げ等の問題があります。

三次市では「ひろしまの森づくり県民税」を財源に竹林の繁茂防止を目的とした里山林整備を行っていました。また、除草剤による環境負荷への懸念がありました。また地域資源の有効活用の面から「無煙炭化器を活用した竹林の繁茂対策」を市に紹介し、市民への無償貸与が可能な無煙炭化器を購入していただきました。

講習会の対象者は 住民自治組織

講習会は、無煙炭化器（※1）

とすでに導入済みであつたウッドチップパー

（※2）の活用をテーマとしました。開催の

案内は、市内にある18の住民自治組織と地域コミュニティセンター、無煙炭化器／ウッドチップパーの貸し出し窓口である地元森林組合に行い、15名の参加がありました。

当日は、まず座学で林研グループによる無煙炭化器の使用法を紹介しました。そのあとウッドチップパーについて

地元林業機械販売会社から安全な使用方法の説明を受け、竹林整備地でチップパーの始業点検方法、構造確認、始動から緊急停止、粉砕作業までを参加者全員で実際に



無煙炭化器の説明

行いました。

チップパー機は大きすぎないサイズであるにもかかわらず、竹はもちろんだiameter 15 cm 程度の雑木でも軽々と粉砕し、チップにしてい



できあがった竹炭



無煙炭化器の燃焼の様子



ウッドチップパーの説明と実際の操作体験

ます。思ったより細かく粉碎され、伐採後に集積してあつた竹が減容されました。

無煙炭化器については、講習当日が暖冬で積雪もなく強風下という状況であつたため作業を断念し、代わりにグループで試作した竹炭の確認をしてもらいました。炭焼き器としてだけでなく、たき火器としても、着火が簡

易でよく燃える優秀さについて報告させていただきました。



炭焼きのほか、たき火も楽しめる無煙炭化器

林研グループでは、これまでに300 kg以上の木炭生産ができる大型窯での炭焼きやドラム缶炭窯の作成をしました。今回の無煙炭化器での講習は、林研として活動のスケールダウンは否めませんが、この炭化器は軽量でどこにでも運びやすい上に、着火から炭化、消火に至るまでに時間がかからず簡単です。市内の多くの自治組織等に活用いただき、竹林の繁茂対策にとどまらず、楽しいたき火の機会提供や地域資源としての竹林活用につながるきっかけとなれば幸いです。

*まとめ

会長
新見文章

事

私たちのチャレンジ！

例

継続15年 高校生への間伐指導

千葉県林業研究グループ連絡協議会「千葉県」

自分たちにできること、
やるべきこと

千葉県林業研究グループ連絡協議会（以下、当会）は、会員の所有林における森林の手入れや、地域の森林所有者からの森林整備の請負などの活動を行っています。

日々、自分たちにできることは何かを考えながら、活動に取り組んでいるのですが、森林を整備して所有し続けることで、森林の多面的機能を保ち続けること以外にも、何かできることはないか、ということが大きな課題となっていました。そのような中、自分たちの技能を生かした取り組みとして、技術を継承して後継者を育成しよう、県内で唯一森林・林業関係の学科がある県立君津青葉高等学校

校の高校生への技術指導を15年前から継続しています。

指導における工夫

間伐体験に参加する生徒には、会員から森林の仕事に関する話をします。近年では高校を卒業し、地元の森林組合等に就職した先輩にも声をかけ、生徒の前で仕事についての話をしてもらっています。

体験は複数班に分かれて実施します。「伐倒・玉切り・枝打ちの班」は、周囲の班から大きく距離をとり、安全を確保した上で作業に取り掛かります。なるべく伐倒の難易度の低い木を選定するのですが、それでも難易度が高そうな場合は、会員が牽引具を伐倒木に設置してから、作業を行います。

一方「はい積み」の班は、重機



木の重心についての指導



伐採時の姿勢についても確認



伐採後に受け口と追い口とツルの確認



玉切りの指導

＊まとめ
会長 岩井 誠

林組合等に就職する生徒もいます。また高校生たちの「大変だけど、面白さがわかった」「どんな仕事か知ることができた」という声がとても励みになるため、今後もこの取り組みを継続していきたいと思っています。



刃先が下がらないよう指導

を用いた丸太の移動やはい積み、林内作業車を用いた集材作業を体験します。午前と午後で班を入れ替えて、生徒全員が全ての体験を行うことができるようにしています。

必要です。初心者の生徒にチェーンソーを持たせるため、安全を考慮し、生徒一人に対して、指導者が一人以上張り付きます。また周囲の状況の確認や安全を確保するために、指導の補助者も設置しています。安全な間伐指導のためには、かなりの人数を要するため、当会の会員に呼び掛け、県内各地の会員が集まり、間伐指導に当たっています。

教える側にも 学びの終わりはない

間伐体験後には、会員相互で振り返りを行い、その内容を次の指

導に生かすことを大切にしています。木が一本一本異なるように、生徒も一人一人が異なるため、指導方法についての学びも終わりはない、ということを感じています。

高校卒業後に県内の森



反省会での活発な意見は次に生かします

事

私たちのチャレンジ！

例

継続20年以上 小学校での体験教室

佐伯市林業研究グループあさぎりの会「大分県」

若手が多く職業さまざま

佐伯市は大分県の南部にあり、古くから林業が盛んな地域です。

「佐伯の殿様浦でもつ、浦の恵みは山でもつ」と言われ、佐伯藩は日本で初めて魚つき林保護の御触書を出したと言われています。

佐伯市には5つ

の林研グループがあり、70名以上の会員がいます。近年は素材生産で勢いのある林業事業体の若手も加入し、50代以下が1/3を占めます。そのうちのひとつ、あさぎりの会の会員は13名で、職業は農林家、大工、公務員とさまざまです。

木工やシイタケの駒打ち
小学校での体験教室

会の活動として、20年以上前から地元小学校で木工教室を行っています。小学校はスギ山に囲まれた場所に立っており、窓から見えるスギがどのように活用されているか知ってもらいたいという思いで続けてきました。会長の甲斐源市さんは大工で、通称「大工の源さん」と呼ばれています。毎回、大工の腕を生かした熱烈指導で完成度の高い本棚や体育館用具



シイタケの駒打ち体験教室



昨年の林研グループ九州地区交換研修大会では、みごと準優勝を獲得



地元小学校での木工教室

**さらなる
技術向上を**

会員の技術向上のための活動として先進地研修等も行っています。令和4年度は山口県農林技術センターを訪ね、センダヤやコウヨウザン等の早生樹を活用した再造林について早生樹の可能性などの意見交換をしました。

また、会員が県林研に働きかけ、「森フェス」という森林・林業教育の体験イベントと共催し、伐木大会を開催しました。あさぎりの会からも2名が参加しました。みどりの少年団が見学

◆

佐伯市でも年間300ha以上の再造林が行われており、地元の農林家が協議会を作り、佐伯広域森林組合と連携してスギコンテナ苗生産に取り組んでいるところです。あさぎりの会の会員4名もこれに加わり、技術向上と増産に取り組んでいます。

に訪れ、チェーンソーで手際良く伐木する山師の姿に「すげー！がんばって！」との声があがりました。高い技術には基本的な安全対策が必須であることを、改めて確認する良い機会となりました。林業が再び循環を始めた佐伯で、林研グループは林業の担い手として重要な存在です。今後も活動を応援したいと思います。

＊まとめ

南部振興局

林業普及指導員 松原恵子

(所属は執筆時)

を作成し、子どもたちや先生からは「初めての体験だったけど、うまくできてとても楽しかった」と喜びの声が挙がります。

また大分県特産のシイタケ栽培に興味を持ってもらうため、駒打ち体験教室も開催しています。会員がシイタケ栽培について語り、駒打ちの手ほどきをするこの活動も20年以上継続してきました。ほだ木は校庭に伏せ込み、児童は収穫を楽しみにしています。このような交流を通して林業に親しみをもち、将来は後継者になっ

てほしいという願いを込めて活動をしています。

最近子どもたちはSDGsについて学習しています。会としてこれまで無意識にやってきた活動は、実はSDGsの目標とつながっており、「林業は活動そのものがSDG



会員による間伐研修



森林組合と連携したスギコンテナ苗生産に参加

事

私たちのニューフェイス

例



Uターンで林業に就き、起業。 木炭の地産地消をきっかけに加入

三隅林業研究グループ「山口県」／福永篤史さん

演劇の世界から林業界へ

福永篤史さんは、約2年前、35歳の時に三隅林業研究グループ（以下、三隅林研）に入会しました。まだニューフェイスではあるものの、会の主力メンバーの一人として活躍しています。

昭和61年、山口県長門市で生



学生時代の福永さん

まれた福永さんは、高校時代にフアッションや映画に興味を持ち、東京の専門学校へ進学します。カメラや服作り、フアッションショーの企画など、林業とは全く縁のない学生生活を送りました。卒業後は演劇の世界へ進み、歌舞伎の衣装制作などに約10年間携わりました。公演のたびに全国を飛び回っていたそうです。

充実した日々を過ごす福永さんに転機が訪れたのは、子どもが生まれた平成29年のことでした。当時の職場は拘束時間が長く、不規則な勤務体系だったので、家族との時間が持たないことに違和感を覚えるようになりました。将来を見据えて転職・移住を決意します。転職を考える日々の中、たまたま目に留まった雄大な巨木に魅了

され、木に関わ

る仕事があった

と「森林の仕事

ガイドランス」に

参加しました。

そこで見つけた

県内の製材・木

材加工などをメ

インに営む事業

体に、自らアップ

ローチして林業

界での第一歩を

踏み出します。

その後、林業

を基礎から学ぶため森林組合に勤務し、さまざまな実務経験を積み

ました。そして令和3年10月に林

業事業体を設立し、現在は素材生

産、支障木伐採、森林環境教育の

3本柱で事業を行っています。



令和3年に林業事業体を設立。最近導入した機械と福永さん

焼き鳥と炭焼きで 地産・地消の活動

林業を一生の仕事と決めた福永さんは、いずれは森林を所有したいという希望を持っていました。



「令和5年度全国林業グループコンクール」で林野庁長官賞を受賞。発表をした福永さん（右）と山本会長

とはいえ、まだ「林家」ではない福永さんには、地域の林家の方々ととの接点がありませんでした。そんなある日、山口県下関農林事務所を訪れたときに、地区林研事務局との雑談の中で「長門の焼き鳥と炭焼きで地産・地消の活動が始まる」と耳にします。もともと広葉樹の活用に強い関心を持っていた福永さんは「面白そう！ 参加したい！」とその場で参加の意思を表明しました。

「林業を生業にしている若い人が活動に参加したいと言っている」と耳にした三隅林研の山本英雄会長は福永さんを大いに歓迎し、福永さんの入会が決まりました。

た。「木や山のことをわかっていて、山仕事もできる。グループの将来に必要な人材が現れた」と山本会長は心強く感じたそうです。

新たな視点で林業に関わる人を増やしたい

現在、三隅林研では「みすみ炭」という木炭を生産しています。市内の焼き鳥店などで組織する「長門やきとり横丁連絡協議会」が地元産の炭を求めたことがきっかけで誕生しました。里山整備で伐採した雑木を炭にして、焼き鳥店へ出荷しています。



植樹体験イベント

他にも三隅林研は、以前から地元小学校での森林体験学習活動を継続しています。「みすみ千年の森」に続く林道での草刈り作業等、地域に根差した活動です。福永さんは活動に参加する中で「先輩方の息遣い、昔ながらの知恵や経験を学んでいる」と感じるそうです。

「楽しみながら、地域に根づいた『人間味のある』林業に参加していきたい」という希望を持って

今後の展望について「炭焼きや里山整備体験などを通じて森林と関わる人の視点からは、林業関係者とは全く違う一面を感じる。それがこれからの林業には求められると思う。木炭の生産量を少しずつ増やし、一般的な林業とは違った視点で林業に関わる人を増やしていきたい」と熱く語る福永さん。県林研事務局として、福永さんのご健勝とますますの活躍を期待しています。

＊まとめ

山口県林業研究グループ
連絡協議会

事務局 木村衣里菜



ツリークライミング体験会にて娘さんと

事

私たちのチャレンジ！

例

森林と人が共に育つ 森林環境「共育」

館岩グリーンフォレスト―「福島県」

森林環境教育への 取組

館岩グリーンフォレストは、
福島県南会津町館岩地区（以下、
「館岩地区」という。）で活動する

林業研究グループです。メンバー
は30～40代の森林組合職員や農協
職員、役場職員の男女11名で構成
されております。主な活動は「森
林環境教育」や「人と野生動物の
緩衝帯づくり」です。今回は「森

林環境教育」の取り組み
についてご紹介させてい
たきます。

われわれが活動する館
岩地区の特徴は、福島県
南西部に位置し、近隣に
は尾瀬国立公園や只見ユ
ネスコエコパークなど、
自然豊かで昔ながらの農
山村風景に囲まれている
ことです。

この豊かな自然環境の
中で子どもたちが森林に
慣れ親しみ、少しでも林

業について知り、
興味を持つてもら
うため、森林環境
教育に取り組んで
おります。

森林環境教育は
幼少期からの教育
が重要といわれて
おり、その経験や
体験が貴重な糧と
なり、将来にわた

り森林・林業への
意識醸成に役立つものと考えてお
ります。また、地元の森林・林業の
担い手を育成するためには郷土愛
を育む必要もあり、地元に着し
た活動が将来の森林・林業の地域
の担い手づくりとして期待されるこ
とから、地元の幼稚園児や小学生
との交流事業を展開しています。

地域外の学校も受け入れ、 森林環境「共育」

館岩地区を含む福島県南会津町
では恵まれた自然を生かし、アグ
リツーリズムやグリーンツーリス
ムなど農山村での自然体験を南会
津町や南会津農村生活体験推進協

担い手育成のため郷土愛を育む



地元小学生による間伐体験





幼少期からの森林環境教育を重要視



幼稚園児のきのこ植菌体験

議会など行政が主導して関東方面などへ粘り強く広域的にPRしてきました。その結果、館岩地区への宿泊体験を希望する学校が増加

林業体験では、よりよい森林づくりのために間伐が必要であること、間伐で出た材は木質バイオマス等に利用され

す。
また、館岩地区では人口減少、少子高齢化により一段と過疎化が進んでおり、森林の手入れがされないことによる荒廃が懸念されております。このため、われわれは森林を守り育て、雄大な自然環境と共存するとともに、町民・地域間交流によって環境の改善を図るため、森林と人が「共に育つ」という意味を込めて森林環境「共育」をコンセプトとして、全国林業研究グループ連絡協議会の支援をいただきながら森林・林業体験を実施しています。

また、館岩地区では人口減少、少子高齢化により一段と過疎化が進んでおり、森林の手入れがされないことによる荒廃が懸念されております。このため、われわれは森林を守り育て、雄大な自然環境と共存するとともに、町民・地域間交流によって環境の改善を図るため、森林と人が「共に育つ」という意味を込めて森林環境「共育」をコンセプトとして、全国林業研究グループ連絡協議会の支援をいただきながら森林・林業体験を実施しています。

してきており、われわれはその受け入れ先として森林・林業体験を実施してきました。



地域間交流による林業体験1（間伐・枝打ち）

林業体験で実施したきのこ植菌や間伐体験の取り組み成果としては、地元の幼稚園児や小学生との交流により、保護者をはじめ地域住民のみなさんにわれわれの活動

県外からの体験希望は毎年10校以上

林業体験に参加して森林や林業のことを知ることができてよかった」などの感想をいただきました。

ていることなどの理解を促すため、実際に間伐を体験してもらいました。伐倒後は、輪切りのコースターなどを作成し、記念にお土産として持って帰っていただきました。「林業体験に参加して森林や林業のことを知ることができてよかった」などの感想をいただきました。



地域間交流による林業体験2（間伐・枝打ち）

代表 星 祐治

今後も地元の幼稚園児、小学生と交流を図りながら、県外の学校とも地域間交流を深めていける活動を継続していきたいと思っています。

への賛同が広がっています。当地域での林業体験を希望する県外の学校も毎年10校を超えており、われわれの取り組みが徐々に地域間交流に寄与する形となつて現れつつあります。

事

私たちのチャレンジ！

例

山の恵み「薬草」で暮らしを豊かに

真庭森林・林業研究会「岡山県」

「美作材」の流通拠点

真庭森林・林業研究会は、岡山県北部の真庭地域（真庭市と新庄村）で活動しています。真庭地域には原木市場3カ所、製品市場1カ所、製材事業者32社が立地し、木材生産から製材加工、流通にいたる「美作材」の流通拠点となる

ています。研究会の現在の会員数は20名で、林家、素材生産業者、苗木生産者、家具職人など多彩な人材で構成されています。

研究会では長年、「真庭産優良材品評会」を開催し、目揃いや枝打ち・間伐の実施状況を審査し、優れた保育技術を顕彰することで、

優良材の産地形成を図ってきました。また平成16年に台風

第23号の襲来で甚大な風倒木被害が発生した時には、被害実態の調査、森林所有者の意向調査を行い、災害に強い森づくりの指針を報告書「未来に引き継ぐ真庭の森づくり」にまとめました。



品評会で優良材の産地形成（平成27年まで実施）



林業の盛んな富原地区の小学校での林業教室

近年では、素材生産業を営む会員による「富原の林業に親しもう」と題した小学校での林業教室や、家具職人である会長の「家具づくり塾」や親子木工教室など、木に触れる機会を提供しています。



フィールドワークでジャムに加工するスイバを採取

薬草を活用した ワークシヨップ

さまざまな活動のなかでも、今回は、薬草活用の取り組みについてご紹介します。

「日々の暮らしに薬草を」をテーマに、日常生活に薬草を取り入れていくことで楽しく健康に日々を過ごすことを提案しています。タンポポ、オオバコなど、身の回りに自生している草には、薬効があるものもあります。薬草を身近に感じてもらうために、薬草ジャム作りなどのワークシヨップをこれまでに30回程度開催してきました。

ワークシヨップでは薬草をその場で採って、調理して試食したり、加工体験して持ち帰ったりしています。参加者は、子育て世代や、健康に気をつかう世代など食に関心のある方々が多く、身近にある植物がおいしく食べられることに感心する姿が見られます。また「防災食としての薬草活用ワークシヨップ」として、フィールドワークで身近な薬草を

知り、それらを活用した防災食をみんなで試食し、災害時に備えようというワークシヨップも開催しています。

山野草11種類の 「里山キッチンカレー」

もともと薬草の活動は「富原婦人林業研究クラブ」という女性林研（真庭森林・林業研究会に加盟、現在は解散）が、野草の薬用効果や料理方法を学び商品開発を行っていました。その取り組みが話題となり、平成29年には真庭市で「全国薬草シンポジウム」が開催され、平成30年に「真庭・食べる薬草振興協議会」が設立されました。



「里山キッチンカレー」のレトルト（右下）チラシ、薬草料理冊子

協議会では、地域の山野草11種類を採取して「里山キッチンカレー」を生産しています。材料はベニバナボロギク、イノコブチ、ヤブカンゾウ、アザミ、タンポポ、オオバコ、ハコベ、ヨモギ、ノビル、セリ、ユキノシタです。それぞれ旬の時に採取し、ソテーして冷凍保存しておき、年に1度まとめて加工しています。令和6年5月に岡山県で開催された「第52回全国林業後継者大会おかやま2024」にも出展しました。



ジャムづくりワークショップでの調理の様子



後継者大会に出展

薬草を山の恵みと捉えることで、森林・林業の可能性が広がります。林業に携わる人だけでなく、地域内外の様々な人に広く山に関心を持つてもらうことは、真庭の林業の将来にとって大切なことです。真庭地域には、地域一体となつて物事を考える風土があり、これから関係団体と連携して、地域を盛り上げる活動が続けていきたいと考えています。

＊まとめ

美作県民局 真庭地域森林課
林業普及指導員 小川章子

事

私たちのチャレンジ！

例



「お山を学ぶ」。生き物観察や森林のしくみを学ぶ

地域の「こども食堂」と 協働

岩手県森林組合青年部連絡協議会（会長・澤 幹信）は、県内の森林組合青年部を構成員とする協議会組織として昭和53年に創設されました。現在は8青年部会を3

岩手県森林組合青年部連絡協議会「岩手県」

ブロックに分け、運営しています。今回は、協議会が青年部の活力となることを目的に実施している「お山食堂」を紹介します。

「お山食堂」は、一般市民を対象とした森林に親しむ機会として企画したものです。森林・林業活動におけるSDGsに対応した内容となっており、祝日「山の日」の一環事業として実施しています。

当地域には「こども食堂」の活動があり、「こどもを孤立させない地域づくりの創出」という主旨で活動をしています。その「こども食堂」が、活動場所を求めていることを知り、われわれがフィールドを提供することで、林業の認知度を高め、担い手の不足に



「お山で食べる」。昼食と一緒に食べて「ごちそうさま」までが活動

も一役を買うのではないかと考えました。そこで、山側の森林組合青年部と地域側の「こども食堂」運営者が協働企画を実現することになりました。双方のできることを生かし、不足を補うという形ができていることが特徴的です。

普段できないことを提供

「お山食堂」という名称は、「こ



「お山をみんなで楽しむ」

ども食堂」を運営する「認定NPO法人インクルいわて」が実施する職業体験活動「インクルしゃいん食堂」を参考にして、林業体験版として命名しました。2019

「お山食堂」から始まる林業の未来



「お山で働く」。森林や林業の作業を体験



「お山で遊ぶ」。山にあるものを活用してブランコを作成

年から年に1、2回開催しており、毎回親子15〜32名の参加があります。

スタッフは当協議会のメンバーのほか青年部に声を掛け、毎回10名前後の体制で実施しています。

内容としては、毎回テーマを設定し、薪割り体験、木工・クラフト体験、落ち葉かきの森林整備、植栽を通した森林づくり、生き物観

察や森林のしくみを学ぶ学習、伐倒・造材のデモンストレーションを見学するなど森林や林業の作業を体験する活動を午前中に行います。

「こども食堂」との連携でもあるので、昼食と一緒に食べて「ごちそうさま」までの活動を行います。食材については「こども食堂」へ寄付された食材等を活用し

ながら、会場の雨天時も利用できる野外炊事場で、バーベキューや窯でのピザ焼き、炭火での川魚の塩焼き、ご飯を薪で炊く、きのこ山菜の汁物を作るなど、食においても

普段の「こども食堂」ではできないことを提供できていると感じます。もちろんテーマに合わせた活動にとられず、その場にあるものを活用して、ブランコの作成や、丸太の輪切りを活用したボーリングなど、遊びのネタは尽きることがなく、時間を忘れて一緒に楽しんでいる姿が印象的です。

参加者からの声は次の通りです。

・お腹いっぱい自然の中、みんなで食べておいしかったです。

・まき割り体験やアスレチックなど、とても楽しく過ごすことができました。いろいろな人とお話しできてよかったです。

・涼しい環境の中で子どもたちが元気いっぱい走り回って遊んで、こちらもうれしくなりました。

「場」の共有から得られる物事

子どもたちと一緒に作業をして、一緒にご飯を食べるという「場」の共有から得られる物事は大変多いと感じています。活動に「SDGs」という言葉を入れています。が、「お山食堂」ではそれを前面に出すのではなく、活動を通して自然と目標に貢献しているという形にしていきたいと考えています。活動としてはようやく7年が過ぎたところで、現時点としては「できる」ということが周知されてき



「お山を整備する」。落ち葉かき、植栽を通した森林づくり

たところ。当初の目的としては、メンバーの青年部の活力となることとしているので、今後の展開としては、各青年部が地域の「こども食堂」等と協働し、各地での「お山食堂」が開催されるように支援していきたいと考えています。

参加者の声を得て、森林・林業に対して自信と希望を持ち、地域林業の発展に寄与していくという明るい林業の未来を描ける林業者を育てていきたいです。

＊まとめ

事務局長 木幡英雄

